

浅草詣

伊藤左千夫

青空文庫

一月十一日、この日曜日に天気であればきつと浅草へ連れて行くべく、四ツたりの児供等と約束がしてあるので、朝六時の時計が鳴ったと思うと、半窓の障子に薄ら白く縦に筋が見えてきた、窓の下で母人の南手に寝て居った、次の児がひよつと頭をあげ、おとっさん夜があけたよ、そとがあかるくなってきました、今日は浅草へゆくネイ、そうだ今日はつれてゆくよ、今まで半ねぶりで母の乳房をくちやくちやぶつて居た末のやつが、ちよつと乳房を放して、おとっちゃん、あたしもいくんだ、あたしも連れていってよ、そうそうおまえもつれてゆくみんなつれてゆく、アタイおもちや買って、雪がふったら観音様にとまるよ、幼きもののこの一言は内中の眼をさました。

台所の婆やまでが笑いだし、隣の六畳に祖母と寝て居った、長女と仲などが一度におつかさん天気はえイの、おっかさんてば、あゝ天気はえイよ。

あアうれしいうれしいなア明かるくなつた、もう起きよう、おばアさん起きよう、こんなに明るくなつたじゃないか。

祖母は寒いからもう少し寝ていよという、姉も次なも仲なも乳房にとっついて起きているのも、起きるだという、起ようという起してという、大騒ぎになつてきた、婆や、早く着物をあ

ぶつてという、まだ火が起りませんから、と少しまってという、早く早くと四人の児供らはかわりがわり呼立てる。

もうこうなつては寝ていようとて寝ていらるものでない、母なるものが起きる、予も起きる、着物もあぶれたというので、上なが起る次なが起る、仲なものも起る、足袋がないとさわぐ、前掛がないと泣きだす、ウンコーというオシッコという、さわがしいのせわしいの、それは名状すべからずと云う有様。

手水^{ちようず}つかうというが一騒、御膳たべるというが一混難、ようやく八時過ぐる頃に全く朝の事が済んだのである。同勢六人が繰出そうというには支度が容易の事ではない、しかも女の児四人というのであるからなおさら大へんだ、午前中に支度をととのえ、早昼で出かけようというのである。

まず第一に長女の髪をゆう、何がよからうという事、髪はできぬという、祖母に相談する、何とかいう事に極つて出来あがつた、それから次なはお下げにゆう、仲なは何、末なは何にて各注文がある、これもまた一騒ぎである、予は奥に新聞を視ている、仲など末なが、かわるがわる、ひききりなしにやってくる。

おとっさん歩いてゆく、車で、長崎橋まであるいてそれから車にのるの、浅草には何

があるの、観音様の御堂は赤いの、水族館、肴が沢山いる、花やしきちゅうは、象はこわくないの、熊もこわくないの、早くゆきたいなア、おとっさん、おつかさんはまだ髪をゆつてくれないよ、いま髪いさんがきておつかさんの髪をゆっているよ、おとっちゃんおとっちゃんおかさんまだアタイに髪ゆつてくれないよ、アタイ浅草へいっておもちゃ買つて、お汁粉たべる、アタイおつかさんと車にのつていくよ、雪がふれば観音様へとまるよ、イヤおつかさんとねるの、おとっちゃんとねない、アタイおつかさんとねる。

おとっさん早くしないかア、早く着物おきかえよ、お妙ちゃんもめいちゃんも髪ゆうてよ、早くゆこうよう、新聞なんかおよしよ。

髪ができればお白ろいをつけ、着物を着換えるという順序であるが、四人の支度を一人でやる次第じやで大抵の事ではない、予は着物を着換えたついでに年頭に廻残した一、二軒を済すべく出掛けた、空は曇りなく晴て風もなし誠に長閑な日である、まずよい塩梅だ、同じゆくにも、こういう日にゆけば児供等にも一層面白い事であろうなど考えながら、急ぎ足でかけ廻った、近い所であるから一時間半許で帰ってきた。

定めて児供等が大騒をやつて、待かねているだろうと思つて、家にはいると意外静かである、日のさし込でる窓の下に祖母が仲なを抱いていた、三人の児等はあるによつてし

よげた風をしている、予が帰つたのを見て三人口を揃て、たアちゃんおながが痛いて。

祖母は浅草へゆくは見合せろという、いま熊胆を飲ませたけれどまア今日はよした方がよからうという、民児は泣顔あげていまになおるからゆくんだという、流しにいた母もあがつてきた、どうしようかという、さすがに三人の児供等も今は強いてゆきたいともいわない、格別の事でもない様だから今によくなるかも知れぬ、まア少し様子を見ようということにした。

予は何心なく裏口の前の障子をあけて見ると、四人の雪駄が四足ちゃんと並べてある、うえ二人のが海老茶の鼻緒で、した二人のが濃紅の鼻緒である、予はこれを見て一種云うべからざる感を禁じ得なかった。

どれおとつさんに少し抱さつてみい。

予は祖母の抱いている民児を引取て抱きながら、その額に手を当てて見たのであるが、たしか慥に少し熱がある様子だ、もう仕方がない今日は見合せだ、こう予がいうたので児供等は一齐に予を注視して溜息をついた様であつた、それじゃ今度は何日にする、この次の日曜いや土曜日がよい、雨がふつたらその次の日ということに極つて、末なが、お妙ちゃん羽根つこうようと云いだしたをしおにみなみな立つて南手の庭へおりた、たみ児は祖母の膝

によりかかつて眠った様である。

やがて昼飯も済んだが、予は俄にひまがあいてむしろ手持ぶさだという様な塩梅である、奥へ引込で炉の傍らに机を据ボンヤリ坐を占めて見たが、何にやら物を見る気にもならぬ、妻は火を採てきて炉にいれ、釜にも水を張つてきてくれた。

予は庭に置いた梅の盆栽を炉辺に運んで、位置の見計らいなど僣托しながらながめているうち、いつか釜も煮えだしシーチーという音が立つてきた、通口一枚唐紙を細くあけておとつちやんと呼んだのは民児であつた、オーたア児、もうなおつたか、予がこういふと彼はうなずいてホツクリをした、蜜柑を一つやろうか、イヤ、ビスケットをやるか、イヤ、そうかそれじゃもう少し寝ておいでまた悪くなるといけないから。

少さく愛らしき笑顔は引込んでしまった、まア安心じやと思うと表手の方で羽根うつ音が頻にきこえる。

(明治三六年・一九〇三)

青空文庫情報

底本：「土地の記憶 浅草」岩波現代文庫、岩波書店

2000（平成12）年1月14日第1刷発行

底本の親本：「左千夫全集 第二巻」岩波書店

1976（昭和51）年11月25日発行

初出：「心の花 第六巻第二號」大日本歌學會

1903（明治36）年2月5日発行

※「おかさん」と「おつかさん」と「おっかさん」、「おとっさん」と「おとっさん」、「おとつちゃん」と「おとツちゃん」の混在は、底本通りです。

※初出時の署名は「左千夫」です。

※初出時の表題は「浅草詣で」です。

※初出誌の誌名は第六巻第一號から第七號は「コゝロノハナ」ですが底本通り「心の花」としました。

入力：高瀬竜一

校正：noriko saito

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

浅草詣

伊藤左千夫

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>